

# 今後のリンゴの品種の動向について

北海道立中央農業試験場

細貝節夫



## はしがき

りんごはその品種によって収益性が非常に異なる。その収益性は生産面からくると、例えば反収が多いとか、病気に強いとかということよりも市場価格の差によるところが大きいのである。その市場価格は、消費者の好みと、市場に出回る量によって動かされる。

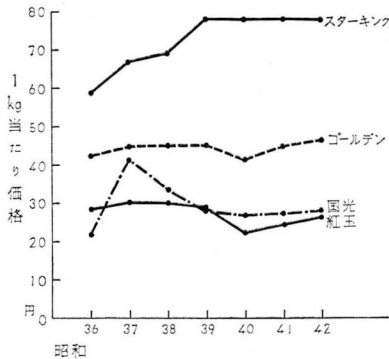
ところが最近、消費の動きの移りが早くなっており、栽培者としてはその点に思いを致さなければならぬ。とくに永年生産物であり、栽植後すぐ生産の上がるものではないだけに、その取扱いは充分意を尽さなければならぬ。しかしながら常に新しいものをもとめるといっているのであってもいい。

新しいもの即ち良いものであるとは言えないのであり、新品種が出たとしても、それが市場価値が認められるまでには、長い年月を要するものであり、二十年の年月を要するとの説もある位であり、りんごの品

種の選択には、新品種の古いものを選びとられる位でもある。

このようなことを念頭においてゆくべきものであることをはじめに記したい。

第1図 品種別1kg当り価格の推移 (北海道産、札幌市場)



### 一 市場からみた品種の動向

#### (1) 札幌市場の価格の動き

第一図に最近七年間の札幌中央卸売市場における品種別価格の動きを示したが、まず品種間における価格差の大きいことは、今さらの如くに感ぜられる。すなわち、ス

ターキングは、国光、紅玉(+)、約三倍近い価格を示している。とくにスターキングは、昭和三十六年から三十九年にかけては急激に上昇しているが他品種はほとんど横ばいかわしろやや下向気味である。

消費の動向を示すものとして、昭和三十八年に、農林省が発表したりんご主要品種の所得弾性値はこの間の事情をよく現わしている。すなわち国光(+)・一四、紅玉(+)・一八〇であるに對し、スターキング(+)・一八六、ゴールドデン(+)・二三ということである。所得がのびると、国光、紅玉の消費は減じ、スターキング、ゴールドデンの消費が伸びるということであり、スターキングの(+)・一八六は、前年に発表されたみかんの(+)・一七を上まわるものである。

しかしながら、スターキングにも問題はあつた。札幌市場における一き当たりの価格は、昭和三十九年以来、四十二年まで七十八円と言ふことから変化をしていないのである。その間の諸物価、労賃等の上昇を考へるならば、むしろ相対的には下降していると言へるのではないであらうか。勿論、市場価格は、その入荷量によって大きく影響されるが、この点をみると、昭和三十八年に比べ、昭和四十年は三倍、四十一年は四倍、四十二年は四・四倍となつており、入荷量が急激に増加している。入荷量の増大が著しいことからみて、価格が横ばいであつたと言ふことは、如何に需要が多かつたかということになり、価格の頭打ちが即悲観の材料とはならないであらうが、スターキング万能の時代に対する警告としてみ

るべきであらう。

(2) 産地価格の動向  
青森県の例について、産地価格と、生産量の関係もまた興味深い。

昭和二十五年から昭和三十九年までの資

第1表 青森県における生産量と産地価格の関係 (昭和25~39年について、青り試)

品	種	相 関係 数
祝	旭	-0.66
紅	玉	-0.87
デ	系	-0.96
リ	度	-0.81
ン	光	-0.70
印		-0.94
国		

料をもとに青森県りんご試験場の試算をみると次のとおりである。この際価格は消費者物価指数で修正してある。

祝ではこの期間内の五ヶ年毎の移動平均の順位と価格の関係が大きく、(+)・〇・九の相関を示し一年に一箱当たり十九円宛価格が低下していることを示している。これは生産量と価格の関係以上であり、生産量は年々低下しているが、価格もまた低下していることからみて、この品種は明らかに斜陽を示している。

旭では、生産量と価格の関係が大きく、計算式により求めると生産量が十万箱増加する毎に一箱当たりの価格は百十円ずつ低下すると計算される。紅玉でも同様で百万箱増加する毎に一箱当たりの価格は八十七円宛低下するし、国光も同様で、生産量が百万箱増加するごとに一箱で三十九円低下

する。デリシヤス系は、相関関係はやや低い、十万箱の増加で、一箱当たり十五円低下するという計算になる。

これらは一つの目安にすぎないが、生産量の増加が、価格とくに産地価格に反映することはまぎれもない事実で、生産に伴う消費の拡大と、生産費の低減が大きく要求され、消費拡大の一つの対策としての新品種が要望されるわけである。

## 二 苗木栽植からの動向

戦後の一時期は、りんごは作りさえすれば売れるという時があり、品種についての関心も低く、栽培上からただつくりやすいものが求められた。デリシヤス系はその点で、あぶらむしに弱い（農薬不足時代には致命的であった）ことが大きな欠陥となりほとんど栽植が進まなかった。昭和三十一年、りんごは一つの大きな転換をむかえた。それは史上空前の豊作にあい、そして、価格の低落であった。このことは品種選択から言えば国光、紅玉など由来品種に対する大きな警告であったはずである。もともとその前の昭和二十六年に国光に対する批判意見が他から述べられるようになってきた。しかし当時りんご界では、国光に代わるべき品種をもたない限りにおいて、現在自分の持っている商品の悪口を宣伝することはないという思想があり、真剣に取りあげられなかったように思われる。しかしデリシヤス系は次第に多く取り入れられるようになってきた。

第2表 品種別苗木の導入割合  
青森県の例  
(青森県りんご協会調査)

年 品 種	26	32	41	42
	光玉り系度旭し奥ドド他 ツルの計	40.0 12.0	17.7 12.3	0.3 0.2
国紅デン印祝、ふ陸レゴそ	8.9 5.0	2.0 4.6	1.7 0.3	0.1 0.2
	—	—	0.5	10.7
	9.9	0.2	1.9	9.9
	100.0	100.0	100.0	100.0

しかし、苗木では、昭和四十一年までの十年間は、圧倒的にデリシヤス系（スターキング主体）の時代であった。

ところが昭和四十二年に大きな変化が生じたのである。すなわちふじの台頭である。青森県においては、その年の苗木数の六〇%、数にして、二十二万五千四百本のふじが導入されたのである。その他むつ、レッドゴールド等の割合が増加している。しかし、デリシヤス系はわずか一五%に落ち、少なくとも、苗木の動向からみた場合には、デリシヤス系の天下は十年間で終わったかにみえる。しかしデリシヤス系の生産は未だそう多いわけではなく、デリシヤス系の真価が問われるのはこれから先であろうが、苗木の動向からみると、りんごの品種の動きも非常にそのテンポが早くなつたように思われる。

## 三 今後の品種

前述のとおり今日ほど品種への関心が強まってきているときはない。しかし、りんご産業全体の体質改善の問題を品種の問題のみに解決しようとするのではい

けない。  
新しい品種がそうすぐでてくるものでもない。やはり現在栽培されている品種の中から徐々にその主要の座を交代してゆくことになるであろう。

## (1) デリシヤス系

従来からのスターキングに加えて、スパータイプの活用を積極的にすすめる。スパータイプとは、芽が非常に密につき、樹が矮性になるものである。私共の圃場での生育状態をみると、レッドスパーマつば砵のものは、スターキングのEMⅦ台のものに比し、接木後五年目の状態で、樹高は同程度で開張はやや狭い状態である。

第3表 スパータイプ樹の結実状態

品 種	樹別	頂芽数	着果数	着果率 %
スターキング	A	56	1	1.8
	B	88	6	6.8
スパータイプ	C	40	18	45.0
	D	62	9	14.5

樹令8年 深川S園

スパータイプの利点は他に立ち枝によく結実することであり、従来のスターキングであれば誘引あるいは捻枝が必要しなければ結果することの考えられなかつた枝によく結実している。また結実の安定度が高いようである。

第三表は北海道深川市のS園における着果状態である。北海道は昭和四十四年度のりんごの開花期は極めて悪天候であり、普通のスターキングは結実率が極めて不良であったがスパータイプ樹は結実率は高くその差はかなり顕著であった。生産の安定性に特徴があると言えよう。スパータイプの内では、レッドスパーマつば台について

もヴァラスによる障害を起こさないのといえよう。スタークリムソン、ウエルスパーマつば台の場合接木障害を起こすので用いられない。なおスパータイプは各地で発見されており、その中の優良なものを用いるとよい。

デリシヤス系としてはこの他ロイアルレッド、レッドキングなど早期着色と着色優良系としての特色のあるものがあるが、これらは熟期は変わりないのであるが、着色が早いため早目に採取することができる。その結果過熟果に多い貯蔵中のゴム類似症の発生を少なくすることができるといふ利点があるし、栽植面積の多い場合この系統の組合わせによつて採取時期の調節に役立つ。

(2) レッドゴールド  
最近青森県でも増加の傾向を示してきたが、冷蔵を行なうならかなり貯蔵がきくので、有利な品種としてみなおされてきている。

(3) 陸奥  
アメリカでは省力品種（結実率が低いので摘果労力が少ないこと、摘果を行なわなくても果実の発育が良いこと、ゴールドンより庄傷が少ないので果実の取扱が容易であることなど）として有望視されている。この点は大きな特色であるが、最近わが国では、着色袋を用い、非常に労力をかけ、着色陸奥をつくっているが、本来の行き方ではないと思う。そのようなことをしなくとも特有の味でうれるであろうし、かなりの品種である。

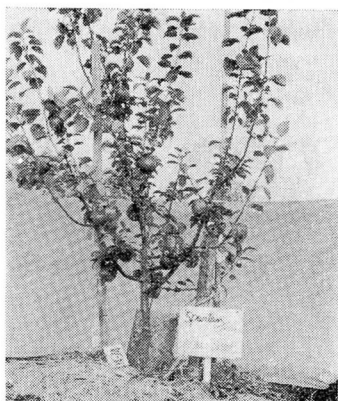
(4) ふじ

最近圧倒的に苗がうれている。東北地方におけるこの品種は、その味の特性から言つて、ゆるがすことのできない主要品種になるであろう。北海道では「ふじ」の味がやや劣るようである。その大量導入は賛成できない。道内においてもいつまでもデリシャスでもないし、ふじにも満足できないとすれば、新品種の育成が始められなければならないときである。

(5) その他の試作用品種

一 タイズマンレッド

英国で発表された品種で、旭とウオセスターペアメンの交配種であり、道立中央農試が輸入したものであるが、道内では九月



スパータンの結実状態

上旬に採収される。果実は非常に鮮やかな濃紅色となり、肉質は旭よりやや劣るが、香りがあり、酸味少く、中生種として一部の試作も良いであろう。高接病のヴァイラスがある。

二 スパータン

青森りんご試が一九五二年カナダより輸

入したものである。旭にニウターンを交配したもので、カナダでは貯蔵されたものは春にはスターキングより高値であると言われ、スターキングに代わって伸びている品種である。青森県では余りよい着色はしな



エンパイアの結実状態

いが北海道では十月に入ると濃紅色に着色する、採収期は中旬である。旭より酸味は少ないが、ふじ、スターキングの味覚を要求されるとすれば、適合しないが、甘酸適和のその味は悪くはない。道内での試作をすすめたい。

三 エンパイア

ニューヨーク農試から道立中央農試が一九六五年に輸入したもので、旭とデリシャスの交配種である。ニューヨーク農試が一九六六年に発表したものである。

旭の二週間後に採収され北海道での採収時期は十月下旬であるが着色は濃紅色であ

る。果実の外観は旭に似て、肉質はデリシャスに似ている。デリシャスより酸味は多い。貯蔵力が高い。ウイルスはない。分岐点の開いた枝が出る。結果年令に達するの

優良リンゴ苗木価格表 (送料別)

推奨品種 以下一本二〇〇円

レッドゴールド

全面濃紅色の中生リンゴです。味も大変良く又結果年令も早く非常に豊産な品質優良種です。熟期は十月上旬。

デリシャス

スターキング

リチャード

戦後非常に増殖された品種で赤いリンゴの代表です。風味品質も最上です。熟期は十月下旬〜十一月上旬です。

特にスターキング及びリチャードは着色も良く今後のリンゴの主力品種です。

ゴールドンデリシャス

本種は黄色リンゴの代表で、味も大変良く、風味品質は最上です。毎年良く成り、貯蔵力も非常に高いリンゴです。

陸奥

現在市販されているリンゴの内では最も大きいリンゴです。熟期は晩生ですが非常に貯蔵力高く色も美しい黄色で食味

が早い。接木後四年目でかなり結実した。評価はまだまだ下されないが、試作の価値はあると思われる。

極めて良く作り易いリンゴです。

ふじ (東北七号)

従来の国光の変わりとして育成されたリンゴで、味も非常に良く、貯蔵性も高く将来晩生リンゴの主力となる事でしょう。

最新品種 以下一本二五〇円

レッドキングデリシャス

スターキングの枝変わりで、非常に着色早く、日蔭においても良く色が着きます。樹勢、果形はほとんどスターキングとかわりません。

スパータンタイプのリンゴ 一本三五〇円

レッドスパードリシャス

スターキングの短果枝型のリンゴで、樹も半矮性です。果実の着色も早く、全面鮮紅色に着色いたします。

ウエルスバードリシャス

スターキングの枝変わり短果枝型で、樹は半矮性で結果年令も早く美しい鮮紅色のリンゴです。